

## 妊産婦用下着の着用状況に関する研究：助産婦学生継続事例へのアンケートから

著者	早坂 祥子, 大槻 静子, 高橋 清子, 高林 俊文
雑誌名	東北大学医療技術短期大学部紀要 = Bulletin of College of Medical Sciences, Tohoku University
巻	2
号	2
ページ	137-142
発行年	1993-09-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/33553">http://hdl.handle.net/10097/33553</a>

## 妊産婦用下着の着用状況に関する研究

—— 助産婦学生継続事例へのアンケートから ——

早坂祥子, 大槻静子, 高橋清子, 高林俊文

東北大学医療技術短期大学部専攻科助産学特別専攻

## Researches on the Choice of Maternity Underwear

Syoko HAYASAKA, Shizuko OTSUKI, Kiyoko TAKAHASHI and Toshifumi TAKABAYASHI

*Course of Maternity Nursing, College of Medical Sciences, Tohoku University.*

Key words: マタニティウェア, 妊産婦用下着, 腹帯

A questionnaire investigation was carried out concerning maternity underwear. It was addressed to the 40 pregnant women who was taken charge of by the students in Course of Maternity Nursing of our college.

The results are as follows.

- (1) All of the patients put underwear on.
- (2) The number of maternity underwear needed varies from patient to patient.
- (3) Most of information used in selecting maternity underwear is obtained from mail-order catalogs (44.8%) and maternity magazines (41.4%).
- (4) At purchase, emphasis is put on the quality of materials, design, and size of maternity underwear.
- (5) The failure rate of the selection of maternity underwear is 37.9%, in which case failures are remarkable in that of brassieres, girdles and shorts.

### はじめに

衣服は身体の保護や保温, 体形のマイナス面をカバーし美しく見せる等, 保健衛生上, 精神衛生上重要な役割を持っている。

わが国における妊産婦用下着の歴史は浅く「医師や助産婦の指導を得ていろいろ研究開発され, 本格的に作られるようになったのは昭和30年代であった」と記されている<sup>1)</sup>。

最近妊娠・分娩のファッション化の影響を受

けてその種類も増えてきたが, 小野が「褥婦の49.3%に下着の種類に不満があった<sup>2)</sup>」と報告しているように, 平常の豊かな衣生活に慣れた妊産婦からは, まだ「選ぶほど種類がない」という声も聞かれる。

妊産婦がどのような下着をどのような基準で選択しているのか, その実態を調査した研究は少ない<sup>2)~4)</sup>。そこで今回, 妊産婦用下着の着用状況を調査し, 今後の指導に役立つと思われる知見を得たので報告する。

## 対象と方法

### 1. 対象

#### 調査 1.

対象群は平成4年度東北大学医療技術短期大学部専攻科助産学特別専攻第14回生(以下本学学生とする)の継続事例40名(初産婦13名, 経産婦27名)のうち回答の得られた29名である。継続事例全員の背景を表1に示す。

本学学生の受け持ち期間は妊娠20週乃至28週から産褥一カ月検診までである。

#### 調査 2.

対象群は本学学生20名である。

### 2. 方法

#### 調査 1.

平成5年1月下旬, 妊産婦用下着の着用状況等を調べる13項目からなるアンケート用紙を郵送し, 無記名で記入後返送を依頼し回収した。

表1. 継続事例の背景 N=40

項 目	人 数 (%)	
年 令	20歳未満	1 (2.5)
	20~29歳	18 (45.0)
	30~36歳	21 (52.5)
職 業	無	27 (67.5)
	有	13 (32.5)
最 終 学 歴	中 学	2 (5.0)
	高 校	23 (57.5)
	短大・専門校	8 (20.0)
	大 学	7 (17.5)
家 族 形 態	核 家 族	30 (75.0)
	複 合 家 族	10 (25.0)
分 娩 月	平成4年9月	4 (10.0)
	〃 10月	19 (47.5)
	〃 11月	12 (30.0)
	〃 12月	5 (12.5)
1カ月時の 母乳分泌	分 泌 良 好	25 (62.5)
	ミ ル ク 追 加	11 (27.5)
	分 泌 な し	4 (10.0)

#### 調査 2.

平成5年2月初旬本学学生に, 継続事例に対する衣服指導の実施状況等を問う4項目からなるアンケート用紙を配布し, その場で無記名で記入させ回収した。

## 結 果

#### 回収率

##### 調査 1.

継続事例40名のうち初産婦8名, 経産婦21名の計29名から回答が得られ, 回収率は72.5%であった。

##### 調査 2.

回収率は100%であった。

### 1. 着用状況

#### 1) 着用率

回答のあった29名全員が妊産婦用下着を着用していた。このうち妊娠期からの着用は27名(93.1%), 産後からの着用は2名(6.9%)であった。妊娠期に妊娠用下着を着用しなかった理由は, 「Lサイズを購入したほうが安価であったから」「思うようなものが見つけれなかったから」「今までのものが着られたから」であった。

#### 2) 下着の種類と産前産後の着用状況

着用した妊産婦用下着の種類と, 産前産後の着用状況を図1に示す。産後はブラジャー以外どの下着類も着用者は減少していた。さらしの腹帯を用いた妊婦は2名のみであった。スリーマーやシャツには初産婦の着用者が一人もいなかった。

#### 3) 主な下着の購入枚数と適切であったと思う枚数

購入枚数と, 実際に着用してみて適切と思う枚数を表2に示す。ブラジャーは大半の人が3枚が適切であったとしていた。スリーマーまたはシャツは, 2~3枚が適切な枚数であったとした人が多かった。最多購入枚数7枚の人も7枚で適切な枚数であったと答えていた。

#### 4) 産前産後におけるブラジャーと乳帯の着用状況

非妊時から産後一カ月までのブラジャーと乳帯の着用状況を表3に示す。

表2. 主な妊産婦用下着の枚数について

下 着 名	購入枚数の範囲	適切と思う枚数
ブラジャー	2 ~ 5	2 ~ 5
ガードルまたは腹帯	1 ~ 4	1 ~ 4
ショーツ	3 ~ 8	3 ~ 7
ストッキング	1 ~ 15	2 ~ 15
スリーマーまたはシャツ	1 ~ 7	2 ~ 7
スリッパ	1 ~ 4	1 ~ 4

表3. 産前産後における妊産婦用ブラジャーと乳帯の着用状況 N=29, (%)

種類	期	非妊時	妊娠期	入院中	産後1カ月
非妊時のブラジャー		29 (100.0)	→ 5 (17.2)	→ 0 (0.0)	→ 2 (6.9)
妊産婦用ブラジャー			23 (79.3)	→ 10 (34.5)	→ 25 (86.2)
乳 帯				12 (41.4)	→ 2 (6.9)
妊産婦用ブラジャー+乳帯				7 (24.1)	→ 0 (0.0)
着用せず		0 (0.0)	→ 1 (3.5)	→ 0 (0.0)	→ 0 (0.0)

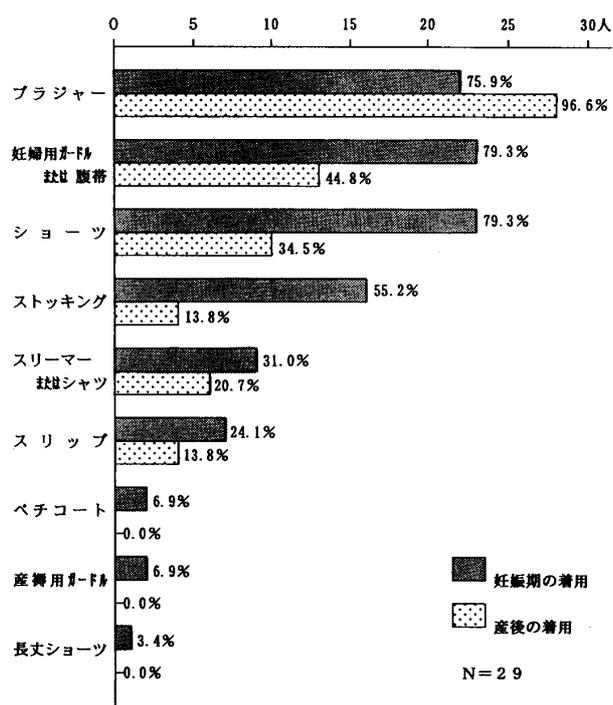


図1. 着用した妊産婦用下着の種類と産前産後の着用状況

(本調査での乳帯とは木綿地のボレロ型の上衣で、前身頃の端を胸の前で結んで着用するものをいう)

### 5) 授乳時におけるブラジャーと乳帯の長所と短所について

産婦のあげた主な乳帯の長所は、授乳が楽、締め付けられる感じがなくゆったりとしている、自分でサイズ調整ができて良い。短所はパットがずれたり落ちたりする、フィット感がない、いちいち結ぶのが面倒、結び目が緩む・かさばる等であった。

次いでブラジャーの長所は、胸の開閉が便利、授乳が楽、パットがずれない、フィット感がある、素材がソフト。短所はホックの開閉が面倒、ボタンがはずれやすい、マジックテープが肌に当たって痛い等であった。

一方看護する側の本学学生は乳帯は結び目を解けばすぐに乳房の観察ができる、マッサージの時ブラジャーのようにまくりあげる必要がなく邪魔にならない、冷罨法がしやすい、乳房のつりあげに便利、タオルを入れる余裕がある等、本学学生の18名(90%)が乳帯の方が看護する際、都合がよかったと答えていた。

### 2. 情報源と本学学生の指導実施状況

購入時の情報源を図2に示す。衣服指導の実施状況と妊婦の記憶を図3に示す。

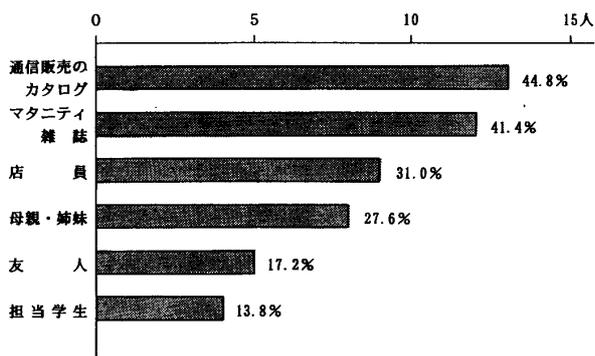


図2. 購入時の情報源（複数回答）

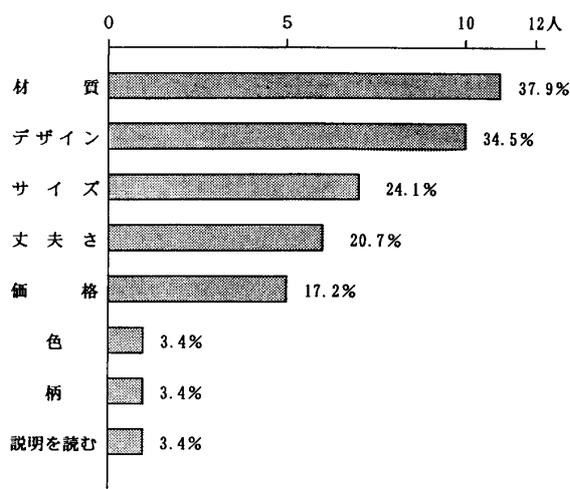


図4. 購入時に注意したこと（複数回答）

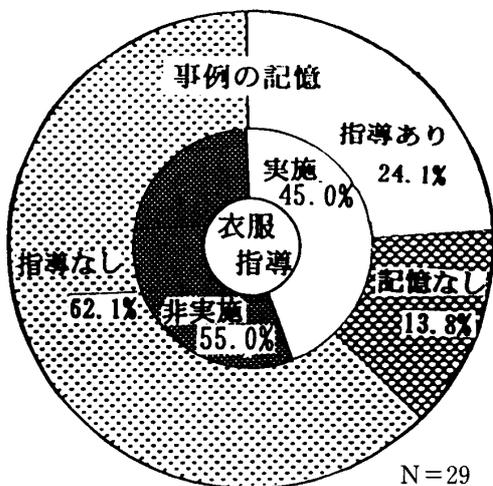


図3. 衣服指導と妊婦の記憶

本学学生が指導を行わなかった理由は、「すでに着用していた」「話す機会を逸した」「わかっていると思った」であった。

### 3. 購入時に注意したこと

購入の際に特に注意したことを図4に示す。

### 4. 購入したが必要でなかった下着

初産婦1名、経産婦2名の計3名（10.3%）が、購入したが必要でなかった下着があったと答えていた。

必要でなかった下着類は、妊婦用ガードル、シャツ、ブラジャーであった。理由は着心地が良くなかった、母乳分泌不良で必要性が生じなかったであった。

### 5. 選択に失敗したと思う下着

初産婦5名、経産婦6名の計11名（37.9%）が

選択に失敗したと思う下着があったと答えていた。

#### 1) 下着名とその理由

選択に失敗した下着は、ブラジャー（8名）、産褥用ガードル（2名）、ショーツ（1名）であった。

理由はブラジャーではサイズと授乳しにくいデザインであった、産褥用ガードルではサイズが合わないであった。

#### 2) ブラジャーのサイズの選び方

産後にサイズが合わなくなった産婦（6名）の購入時の選び方は「ワンサイズ上」、「店員の薦め」「余裕を持たせて」「大きめを」「適当に」であった。一方産前のものを引き続き着用できた産婦（17名）の選び方は「店員の薦め」「フリーサイズ」、他は前述のサイズの合わなくなった産婦と同様の選び方であった。店員の薦めで選んだブラジャーのサイズと産後の着用状態を表4に示す。

## 考 察

松本は「妊婦はただ健康であるだけでなく子供の出生を喜んで待ち望みながら、常に幸福感を持ち、楽しく毎日を過ごしていることが大切である」と述べている<sup>5)</sup>。この楽しく毎日を過ごすための条件のひとつに快適な衣服をあげることができる。

当初より妊産婦用下着は妊婦服よりもさらに贅沢な服といったイメージがあったが<sup>6)</sup>、本調査に

表4. 店員の薦めで選んだブラジャーと産後の着用状態

N=5

非妊時サイズ	→	店員の薦め	→	購入サイズ	→	産後の着用	母乳分泌
※A 70		2サイズ上を		C 70		× (窮屈)	分泌良好
B 70		不明		C 75		○	ミルク追加
B 70		採寸して		C 70		○	分泌良好
B 70		〃		C 80		○	不明
B 80		不明		B 85		○	不明

※初産婦

おいては回答者全員が何かしらの妊産婦用下着を着用しており、また種類別ではブラジャー、ショーツ、ストッキングに予想以上の高率な結果が見られていた。本調査の対象となった妊産婦の中には出産施設を選ぶ際に、東北大学医学部付属病院は分娩費が他院よりも安いという理由から選んだ者もあり、特に裕福な妊婦だけを対象としたのではない。したがって今回の結果から妊産婦用下着は、広く一般に着用されるようになったと解して良いと思われる。このような普及の背景には経済的な余裕の他に、最近の妊娠・分娩体験を大切なものにしたという意識と感覚の変化が大きいと思われる。

下着の種類別の着用状況では、田口が昭和63年に行った腹帯の着用率92%よりも<sup>3)</sup>本調査の結果が低率であった。腹帯の医学的効用が医師・助産婦によって意見の異なる現状にあることの他に<sup>7-9)</sup>、季節的なことやデパート店員の「今の若い人はふだんからガードルをはかないので薦めない」と売れない」という話し等が着用者の減少に関係していると思われる。またさらしの腹帯の着用者が2名のみであったのは、巻き方にコツがいることや衣生活の洋式化が敬遠された理由であろう。初産婦にスリーマーとシャツの着用者が一人もいなかったのも、ふだんの習慣の影響と思われる。

次いで妊婦用ストッキングの着用者が半数以上であったのは、価格が以前より安くなって利用しやすくなったためと思われる。5年前にFデパートから学校用教材として購入した妊婦用ストッキングの1足の価格は1,200円であった。現在では1足350円くらいから市販されている。本調査での最多購入足数は季節的なこともあり15足とそう

多い数ではなかったが、他の下着類と違ってたやすく破れるため、妊婦によっては意外に大きな出費になるとも考えられる。

次に購入時の情報源が、通信販売とマタニティ雑誌の二つが主な情報源であったことは小野の報告と同様であった<sup>4)</sup>。ほとんどのマタニティ雑誌に通信販売のカタログが付録に付いていることから当然の結果と思われる。助産婦からの情報は、母親学級における衣服に対する指導needsは低いという報告もあり<sup>10)11)</sup>、あまり期待されていない感がある。しかし必要としないものを購入してしまったり、選択の失敗が現に生じていることから適切な助言が必要と考える。

購入時に材質に注意していた人が多かったが、実際に市販されている下着はどれも同じような素材でつくられており、見比べて特に材質で選ぶ必要はないと思われ、最初に一応チェックしているということであろうと解した。

各下着の必要枚数は、個人個人で異なることが本調査でも明らかになった。したがって各自の必要枚数は一律に指導できるものではないと言えるが、妊産婦のあげた適切と思う枚数は一応のめやすにできると思われる。

小野は下着類の選択で最も失敗したことにブラジャーのサイズをあげていたが<sup>4)</sup>、本調査でも8名中6名がサイズの選択に失敗している。妊娠・授乳による乳房の変化を具体的に記している文献として、藤沢<sup>12)13)</sup>、小森<sup>14)</sup>、J・ローワーズ、C・オウスナー等<sup>15)</sup>があげられる。藤沢は体形の変化をシルエッターを用いて計測し、妊娠初期から妊娠末期にかけてトップバストは1cmから15cm増加し妊娠34週以降は横這い状となると報告して

いる<sup>12)13)</sup>。また小森はトップバストは約10cmアンダーバストは約9cm増大し、乳房の容積は妊娠前を0とすると妊娠7カ月で2カップ妊娠10カ月で2.5カップ増量する。産後一カ月では容積は妊娠7カ月頃に、アンダーバストは妊娠5カ月とほぼ同じになるとしている<sup>14)</sup>。次いでJ・ローワーズ、C・オウスナー等は妊娠最後の3カ月の胸の大きさと母乳育児している人の胸の大きさはほぼ同じであると報告している<sup>15)</sup>。

以上の妊娠7カ月頃の乳房のサイズが授乳期の乳房のサイズに近いという複数の報告はブラジャーのサイズを決める際の参考にできる。しかし実際には乳房の増大は妊娠中期から著明となることから<sup>12)</sup>、妊婦は妊娠7カ月以前に新調の必要に迫られることが多い。妊娠七カ月以前に、自分の今後の体重増加や乳房の発達、産後の母乳の分泌を予測してサイズを選択することは容易でない。本調査では非妊時、妊娠期、産後の各時期ごとに着用したブラジャーサイズをチェックすることにより、おおよその選択基準が見い出せると考えた。しかし妊娠期に新調したブラジャーを産後も続いて着用できた産婦から得たデータは、サイズ表がメーカーごとに違っていたことや、妊産婦の記憶が曖昧であったことから、選択基準を検索することはできなかった。

### おわりに

各妊産婦は積極的に情報を集め主体的に選択しようとしている。しかしブラジャーの選択においては妊娠・授乳による体形の変化が予測しにくいことから、適当な選択を余儀なくされていることが明らかになった。ブラジャーサイズの選択基準については、今後さらに研究が必要であろう。

### 謝 辞

この研究をまとめるに当たり御協力くださいました妊産婦の皆様と、株式会社藤崎ベビー用品担当の佐藤多恵子様 に深謝いたします。

### 文 献

- 1) 長谷川郁：妊婦の衣服指導，松本清一，新時代の母子保健指導と妊産婦の健康教育，ライフ・サイエンス・センター，横浜，1986，p188-203
- 2) 小野清美，野口厚子：妊娠に関する下着についての実態調査(第1報)，母性衛生，**32**，580-581，1991
- 3) 田口笑子：腹帯の使用実態に関する調査，助産婦雑誌，**44**，313-318，1990
- 4) 小野清美，野口厚子：妊娠に関する下着についての実態調査(第2報)，母性衛生，**33**，519，1992
- 5) 松本清一：少産時代の母子保健，周産期医学，**12**，1481-1482，1982
- 6) 伊藤セツ子，山内芳子，宇留野勝正ほか：妊娠と衣料，平山宗宏，母子用品指導，社団法人母子用品指導協会，東京，1977，p58-124
- 7) 赤沢もとめ，上田礼子，佐々木敦子ほか：妊婦の保健指導，我妻 堯，前原澄子，母子保健講座4，母子保健管理，第2版，医学書院，東京，1981，p163-179
- 8) 伊藤暁子，笠原トキ子，玉田太朗ほか：妊婦の看護と保健指導，松本清一，系統看護学講座専門18，母子看護学2，第7版，医学書院，東京，1992，p64-125
- 9) 菅沼ひろ子，坂倉哲夫，宮里和子ほか：腹帯，助産婦雑誌，**39**，817-821，1985
- 10) 大田ミユキ，折元由美子，信田春美ほか：外来における妊婦の保健指導へのNeeds—聞き取り調査をとおして—，母性衛生，**28**，246-252，1987
- 11) 園田貴司子，野口志津子，古賀千栄子ほか：地域における母親学級の見直し，助産婦雑誌，**35**，826-830，1981
- 12) 藤沢洋子：マタニティを楽しく過ごす衣服の指導，ペリネイタルケア冬季増刊号妊産婦に提供する保健サービス，**50**，146-152，1986
- 13) 藤沢洋子，末原紀美代，芹生順一：妊婦体形の基礎的研究，大阪府立看護短期大学紀要，**1**，48-57，1979
- 14) 小森尚子：産後のボディ美しく，文化出版局，東京，1993，p46-89
- 15) J・ローワーズ，C・オウスナー：母乳育児カウンセリング，青野敏博監訳，メディカ出版，大阪，1989，p189-195